

平成21年 5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520270
 研究課題名（和文） 「語等置の方法」を用いたゲルマン語動詞体系生成に関する比較言語学研究
 研究課題名（英文） A Historical and Comparative Approach to the Genesis of the Germanic Verbal System by Means of 'the Method of Word Equation'
 研究代表者
 田中 俊也（TANAKA TOSHIYA）
 九州大学・大学院言語文化研究院・准教授
 研究者番号：80207117

研究成果の概要：

これまでの印欧語比較言語学研究の中で、十分な歴史的説明を与えてこられなかったゲルマン語過去現在動詞（preterite-present verbs）の現在形の発達に関する詳細、および語根が特異な延長階梯を示す強変化動詞（strong verbs）IV、V 類の過去複数形の発達に関する詳細について、「語等置の方法（the method of word equation）」を援用して新たな説明を提案することができた。それらの動詞形態は、印欧祖語の完了形と別のもうひとつの動詞形態の形態的混交（morphological conflation）を受けて発達したという仮説で首尾一貫した説明ができることを示した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：語等置、動詞体系、ゲルマン語、印欧語、過去現在動詞、強変化動詞

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した平成17年（2005年）度当初では、ゲルマン語の動詞体系の生成過程についての研究状況は、Bammesberger, Alfred 1986 *Der Aufbau des germanischen Verbalsystem*, Winter, Heidelberg で示されている状況から特段の進展を見せてはいなかった。ゲルマン語強変化動詞の過去形、弱変化動詞の過去形、過去現在動詞の現在

形・過去形の歴史的発達について、詳細にわたる説得力のある説明は与えられていない状況であった。これらの点について、経験的証拠に十分に依拠した新たな説得力のある説明を提案することが求められている状況であった。

尚、その当時は未だ Ringe, Don 2006 *A Linguistic History of English*, Volume I: *From Proto-Indo-European to Proto-*

Germanic, Oxford University Press, Oxford が出版されておらず、その 166 ページ以降で提案されている、弱変化動詞 (weak verbs) および過去現在動詞が示す「歯音過去形 (dental preterite)」の歴史的発展の説明については知られていない状態だった。即ち、Tops, Guy A. J. 1974 *The Origin of the Germanic Dental Preterite: A Critical Research History Since 1912*, Brill, Leiden で示されているように、歯音過去の起源について学会の中で *t*-理論 (*t*-theory) と *dh*-理論 (*dh*-theory) が対立する状態がそのまま続いている状況であったと言ってよい。Ringe 2006 によって新たに提案された、「過去分詞中性単数対格形 + 動詞 **dheh₁-*‘put’ の畳音 (reduplication) を伴う未完了過去形 (imperfect)」が 重音脱落 (haplology) によって (あるいは アレグロ形 (allegro form) を生じさせて) 単一動詞化 (univerbation) を受けたという優れた説明により、歯音過去の起源についての学会内における長年の論争は概ね決着がついたと言える。この書物を手に入れて読んだ後は、Ringe 説を採用することとし、本研究の焦点から弱変化動詞および過去現在動詞の過去形 = 歯音過去形の起源に関する考察を外すことを決めた。

2. 研究の目的

従来の印欧語比較言語学では、ゲルマン語強変化動詞の過去形、及び過去現在動詞の現在形は、印欧祖語の完了形を受け継いだものであると考えられてきた。しかしこの観点からのみでは、関連する動詞を見せる様々な特異な形態について十分な説明ができない。特異な語根の延長階梯を示す、強変化 IV, V 類動詞の過去複数形や、完了形語尾を反映した **-ur* (<**-r(s)*) ではなく **-un* (<**-n(t)*) という語尾を見せる過去現在動詞の 3 人称現在複数形 (および強変化動詞の 3 人称過去複数形) などが、十分な説明ができないものである。これらの点も精緻に首尾一貫した形で説明できる新たな論考を産み出すことを研究の目的とした。

3. 研究の方法

印欧語比較言語学の枠組みでなされるどのような論考も、経験的証拠に十分裏付けられてなければ説得力を欠くことになる。ある

動詞の祖語での活用のあり方 (特に、時制・相・法に基づく別個の活用でのアクセントとアプラウトの型) を特定するには、各印欧語に見られる対応する動詞形態の正確な比較分析を必要とする。そのような「語等置の方法 (the method of word equation)」を厳密に適用することにより、個々の動詞の歴史的変遷のあり方の新たな解明のみならず、印欧祖語の複雑な動詞体系からゲルマン祖語の比較的単純な動詞体系へとどのようなメカニズムで体系的に移行したのかについて、新たな知見を得ることを目指した。

また、より説得力ある論考を形成するためには、印欧祖語の動詞体系再建に関しては、最も説明力の高い適切な理論を採用することが肝要である。この点に関して、Brugmann, Karl 以来伝統的に仮定され続けてきたグレコ=アリアン・モデル (Greco-Aryan model) を上回る、アナトリア諸語での動詞体系にも適切な説明を与えられる、Jasanoff, Jay H. が近年提唱した「*h₂e*-活用理論 (*h₂e*-conjugation theory)」を採用することとした。

印欧語動詞に「語等置の方法」を適応して、祖語での活用パターンを再建する作業について、現在の段階での研究成果は、Rix, Helmut Rix et al. 2001 *Lexikon der indogermanischen Verben*, 2nd edition, Reichert, Wiesbaden (以下 *LIV*) に纏められていると言って差し支えない。しかしながら、*LIV* で提示されている各動詞の祖語での活用パターンについては問題となる点も多く、そのような場合には経験的証拠に基づき、また経験的データをより適切に解釈することによって、より優れた代案を示すことも目指した。

4. 研究成果

これまでの印欧語比較言語学研究の中で、十分な歴史的説明を与えられなかったゲルマン語過去現在動詞 (preterite-present verbs) の現在形の発達に関する詳細、および語根が特異な延長階梯を示す強変化動詞 (strong verbs) IV, V 類の過去複数形の発達に関する詳細について、「語等置の方法 (the method of word equation)」を援用して新たな説明を提案することができた。それらは、印欧祖語の完了形と別のもうひとつの動詞形態との形態的混交 (morphological

conflation) を経て生成されたという見地から首尾一貫した説明ができることを示した。

過去現在動詞の現在形の歴史的発達については、印欧祖語の状態的完了形 (stative perfect) と非テーマ母音の語根中動現在 (athematic root present middle) の形態的混交が最も基本的なパターンとなっていたということを明らかにした。「語等置の方法」から得られる経験的証拠から、*wait- ‘know’, *daug- ‘suffice, avail’, *dars- ‘be bold’ など7つの過去現在動詞がこのパターンそのものにより発達したことを明らかにした。他に、ゲルマン語派分離の時点で中動現在形を欠いていたと考えられる *aig- ‘possess’ と *ōg- ‘fear’ は、完了能動形と完了中動形の混交で生じたということも明らかにした。そして、対応する完了形を欠き中動現在形のみが存在していたと考えられる *kann- ‘know’, *ann- ‘love’, *mag- ‘have power’ は、中動現在形を元に、状態的完了形の構造の影響を受けて生成したということを論証した。ゲルマン語の過去現在動詞は、印欧祖語完了形に特徴的だった畳音 (reduplication) を示さないのであるが、本研究が採用する「形態的混交説 (morphological conflation theory)」を用いずに、従来暗黙のうちに仮定されてきた「自発的消失説 (spontaneous loss theory)」を用いると、どうしても説明できない例が生じることも論証することができた。更には、これらの分析によって得られた知見を応用し、従来ゲルマン祖語に認められていた14の過去現在動詞のほかに、文献が生じる時代以前に消失したと思われる過去現在動詞を新たに再建することができることを、経験的証拠に基づいて示した。全般的に言って、ゲルマン祖語での過去現在動詞の生成は、Jasanoff の「 h_2e -活用理論」で想定される印欧祖語の動詞体系内に存在した「状態的自動システム (stative-intransitive system)」に由来するものだという事も明らかにした。(これらの論考は「図書1」にまとめられている)。

ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去形は、祖語から受け継いだ結果的完了形 (resultative perfect) とナルテン未完了形 (Narten imperfect) が混交してできたパターンが元になって発展したことを、同様に論証した。ナルテン未完了過去形は、(初期)

印欧祖語の段階では、強形では語根がアクセントのある延長階梯 (e -階梯) を示し、弱形では語根がアクセントのある e -階梯を示したのだが、後期内部印欧祖語 (Late Proto-Inner-Indo-European) で、あるいは遅くとも前ゲルマン祖語 (pre-Proto-Germanic) までに、強形のアクセントのある延長階梯を示す形がすべての活用形に一般化されたと、様々な経験的証拠から考えられる。そのようにして発達した、アクセントのある延長階梯の語根を示す未完了過去複数形 * $C\bar{e}C-me/te/nt$ が、ゲルマン祖語の強変化過去 IV, V 類の複数形 * $C\bar{e}^2C-um/up/un$ として受け継がれたという提案を行った。また、単数形の * $CoC-h_2e/th_2e/e$ > * $CaC-\cdot/b/\cdot$ は、結果的な意味を表す完了能動形を受け継いだものであるが、印欧祖語完了形固有の畳音を欠いているのは、印欧祖語の段階から畳音のない未完了過去形の影響を受けてのものであると説明できることを示した。(この論考は雑誌論文1にまとめられている。) ゲルマン祖語で強変化 IV, V 類に属する動詞の中には、結果的完了形と非テーマの語根アオリスト形 (athematic root aorist) の混交、あるいは結果的完了形と通常のアンフィキネティック型 (amphikinetic type) の非テーマの語根現在 (athematic root present) に対する未完了過去形との混交の結果、新たな「強変化過去形」を作った例もあったと思われる。そのような場合、過去複数形の語根はゼロ階梯を示し、* $C\cdot C-m\acute{e}/t\acute{e}/\acute{e}nt$ > * $CuC-um/up/inp$ という形態が発達したと考えられる。が、ゲルマン語強変化動詞のシステムの生成段階において、現在形の語幹と過去形の語幹が最適な差異を示すように、過去形語幹のアプラウト階梯を選択し、それを一般化したという補助仮説 (これは「雑誌論文2」で提案した) を本研究では採用し、ゲルマン祖語の段階で * e vs. * u という質的差異 (qualitative difference) を示すパターンではなく、より一層違いが際立つ * e vs. * e^2 という量的差異 (qualitative difference) に基づくパターン (即ち、現在形 * $CeCi/a$ -vs. 過去形 * $C\bar{e}^2C$ -) が、強変化動詞 IV, V 類の型として確立したということも併せて論じた。「現在形の語幹と過去形の語幹の間の最適な差異」という仮説から、他のクラスの強変化動詞のシステムの発達も説明できる可能性があることも示唆し、そ

の詳細な論証は今後の研究に委ねることにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. Toshiya Tanaka “The Proto-Germanic Third Person Plural Strong Preterite and the Proto-Indo-European ‘Type I’ Thematic Present Formations: With Special Reference to the Strong IV and V Classes,” 『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会)、第44号、2009年発行、pp. 1-23、査読無

2. Toshiya Tanaka “Old English *·t* ‘ate’ and the Preterite Plural Formation of the Strong Class V Verbs,” 『英語英文学論叢』(九州大学英語英文学研究会)、第56集、2006年発行、pp13-22、査読無

[図書] (計1件)

1. Toshiya Tanaka *The Genesis of Preterite-Present Verbs: the Proto-Indo-European Stative-Intransitive System and Morphological Conflation* (Languages and Cultures Series XIX). Fukuoka: Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University. 2009年発行、x + 246 pages.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 俊也 (TANAKA TOSHIYA)

九州大学・大学院言語文化研究院・准教授

研究者番号：80207117